

博士論文最終結果報告書

看護学研究科	学籍番号 氏名	176101 金子 友香
論文題目 『一貫した看護過程の展開に向けた実践の質自己評価尺度の開発』 －交替制勤務をする病棟看護師の確実な看護過程展開に向けて－		

審査委員

区分	職名	氏名
委員長	教授	石川 良樹
委員	教授	高井 ゆかり
委員	教授	宮崎 有紀子

論文の要旨

本研究では、交代制勤務において一貫した看護過程の展開ができていくかどうかの実践の質を測定する自己評価尺度の開発を試み、その信頼性・妥当性の検討を行った。質的帰納的研究成果に基づき質問項目の作成と尺度化を行い、専門家会議やパイロットスタディの実施による質問項目の修正を経て、質問紙による全国的な調査（1次調査）及び再テスト法（2次調査）を実施した。調査結果を Messick の手法に従って分析した。

1次調査は、無作為抽出法を用いて探索した病棟看護師 934 名に質問紙を郵送し、566 名から回答を得た。1次調査の結果は、 α 係数が 0.929 であった。さらに、各項目を除外した場合の α 係数が 0.925 から 0.930 であった。主成分分析の結果は、第 1 主成分への寄与率が 34.6%、第 1 主成分に対する負荷量が 0.339 から 0.730 であり、30 項目全てが第 1 主成分に 0.3 以上の負荷量を示していた。本尺度と「看護師の問題解決行動自己評価尺度」の総得点の相関係数は、0.707 ($p < 0.001$) であった。

2次調査は、ネットワークサンプリングにより探索した病棟看護師 65 名に再テスト法を依頼した。2次調査の結果、尺度の総得点の相関係数が 0.781 ($p < 0.001$) であり、1回目と2回目の尺度総得点に高い相関があった。

以上より、内容的側面、本質的側面、構造的側面、一般化可能性の側面、外的側面の各側面において、妥当性を示す指標が高かった。本研究で作成した尺度は、尺度としての信頼性・妥当性を有しているものと思われる。

論文審査の結果の要旨

令和3年12月17日、審査員全員出席のもと、提出された博士論文に関する口述試験を実施した。

尺度妥当性の検討項目の一部が予備審査時から変更された理由、結果の解釈に関する記述、図表の表し方、研究の限界に関する記述等を中心に討議がなされ、整合性が取れるよう修正を求めた。

令和4年1月4日、再提出された論文内容を基に口述試験を実施した。指摘事項は適切に修正されており、回答も適切になされたため、審査員全員が本学博士論文の審査基準を満たしていると判断した。

看護学研究科全教授が参加する最終審査（令和4年2月3日実施）において、著者は、論文の意義・内容を時間内に簡潔、的確に発表した。質疑応答においても、今後の尺度の利用法、本尺度と「看護師の問題解決行動自己評価尺度」との関係性、既知グループ技法の内容等について、自分の考えを適切に述べた。このことにより、本学博士後期課程のディプロマポリシーである「DP4 看護学を専攻する看護専門職として必要な高い倫理的思考力をもち、真理を探究し続ける。」と「DP5 革新され続ける看護学の充実・発展に向けた研究の推進に意義を見出す。」を満たしていると判断した。

以上の結果を踏まえ、最終審査同日に行われた看護学研究科教授会において、本論文が本学博士論文の基準を満たしている旨、全会一致で可決された。